

# としょかん かいちょう 図書館 小聖鳥 トリボン

作：いしいしんじ 絵：かげやまなおこ

## 第5話 トリボンからの贈り物

しばらく、しんとしずまりかえていた図書館に、こどもたちの姿が、少しずつ少しずつもどってきました。

トリボンは、本のかたちのまんま、棚からそおっとのぞいてみました。こどもたちはみんな、見なれないものを顔の下はんぶん（半分）に巻（ま）いています。

それが「マスク」というものだ、図書館にはられたポスターで、トリボンははじめて知りました。図書館でもその外でも、学校にいるあいだ、子どもたちはみんな「マスク」をしていなければなりません。それは、子どもたちとその家族みんなが、元気にこの町で暮らしていくための、たいせつなルールなのです。

「ふうん、それじゃあ、マスクっていうのは、みんなの元気を守ってくれる、いいやつなんだ」

ほうかごの図書館で、トリボンはポスターをみあげ、腕をくんでつぶやきました。

「みんなの笑顔が見えにくいのは、ちょっとさみしいけどさ」

1年生、2年生、3年生、4年生、5年生、6年生。

つぎつぎ、クラスごとに、子どもたちは入<sup>はい</sup>ってきては、すわる椅子<sup>いす</sup>の距離<sup>きょり</sup>をあけて、ねっしんにねっしんに本<sup>ほん</sup>をひらいています。借りて、家<sup>いえ</sup>にもって帰<sup>かえ</sup>ることができないので、そのぶんいっそうていねいに読<sup>よ</sup>んでくれているようです。みんなの真剣<sup>しんけん</sup>な目<sup>め</sup>を遠<sup>とお</sup>くで見<sup>み</sup>ながら、トリボン<sup>とりぼん</sup>は、胸<sup>むね</sup>がぎゅっと熱<sup>あつ</sup>くなりました。そして、図書館<sup>としょかん</sup>を、本<sup>ほん</sup>を、こんなにたいせつにしてくれるみんなに、なにかお返<sup>かえ</sup>しをしたくなったのです。

トリボン<sup>とりぼん</sup>は鳥<sup>とり</sup>ですが、半分<sup>はんぶん</sup>は本<sup>ほん</sup>ですからね。

その日の夕方<sup>ひ ゆうがた</sup>、たまに窓辺<sup>まどべ</sup>に遊び<sup>あそ</sup>びにくる、いたずら好き<sup>からす</sup>のカラスたちに、トリボン<sup>とりぼん</sup>はたのみごとをしました。落<sup>お</sup>とし物<sup>もの</sup>のビー玉<sup>だま</sup>一個<sup>いっこ</sup>のかわりにカラスたちは、まっさらなコッ<sup>こ</sup>ッ<sup>っ</sup>トンの布<sup>ぬの</sup>をビニール<sup>びにーる</sup>に入れて大<sup>たい</sup>量<sup>りょう</sup>にとどけてくれました。

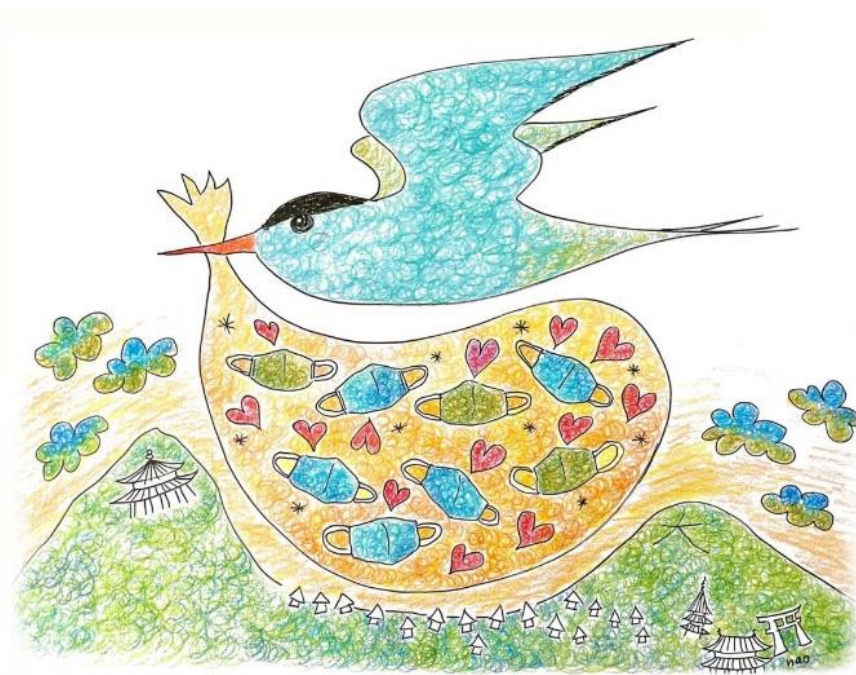
翌朝<sup>よくあさ</sup>、青空<sup>あおぞら</sup>を横切<sup>よこぎ</sup>っていく、旅行家<sup>りょこうか</sup>のキョクアジサシ<sup>きょくあじさし</sup>に、四角<sup>しかく</sup>く切<sup>き</sup>った布<sup>ぬの</sup>のたばをある鳥<sup>とり</sup>のところへ運<sup>はこ</sup>んでくれるようお願い<sup>ねが</sup>しました。かわいたコッ<sup>こ</sup>ッ<sup>っ</sup>ペパン<sup>ぺん</sup>一個<sup>いっこ</sup>とひきかえに、キョクアジサシ<sup>きょくあじさし</sup>は喜<sup>よろこ</sup>んで、海<sup>うみ</sup>を越<sup>こ</sup>え、山<sup>やま</sup>を越<sup>こ</sup>えていきました。

大草原<sup>はたおり</sup>に住むハタオリドリ<sup>どり</sup>は、キョクアジサシ<sup>きょくあじさし</sup>のもってきた布<sup>ぬの</sup>のたばをうけとり、トリボン<sup>とりぼん</sup>の書<sup>か</sup>いたお願い<sup>ねが</sup>の手紙<sup>てがみ</sup>を読<sup>よ</sup>むと、さっそく仕<sup>し</sup>事<sup>ごと</sup>にとりかかりました。ハタオリドリ<sup>はたおりどり</sup>は、かわりのものはなにも欲<sup>ほ</sup>しがりませんでした。どんなことより裁縫<sup>さいほう</sup>仕<sup>し</sup>事<sup>ごと</sup>が好きなのです。

ひと晩<sup>ばん</sup>で注文<sup>ちゅうもん</sup>の品<sup>しな</sup>を縫<sup>ぬ</sup>い終<sup>お</sup>え、キョクアジサシ<sup>きょくあじさし</sup>に渡<sup>わた</sup>します。キョクアジサシ<sup>きょくあじさし</sup>はまた海<sup>うみ</sup>を越<sup>こ</sup>え、山<sup>やま</sup>を越<sup>こ</sup>え、図書館<sup>としょかん</sup>の窓<sup>まど</sup>に、縫<sup>ぬ</sup>いあがった1000枚<sup>まい</sup>の布<sup>ぬの</sup>を投げ込<sup>な</sup>みました。トリボン<sup>とりぼん</sup>とその仲間<sup>ななかま</sup>たちは、待<sup>ま</sup>ってましたとばかり、とりどりの絵<sup>え</sup>の具<sup>ぐ</sup>を筆<sup>ふで</sup>にべったりつけ、いっせいに腕<sup>うで</sup>を振<sup>ふ</sup>るいはじめました。

こんなにもたくさんの鳥<sup>とり</sup>たちが、トリボン<sup>とりぼん</sup>のアイ<sup>あい</sup>デ<sup>い</sup>ア<sup>で</sup>に協<sup>きょう</sup>力<sup>りき</sup>してくれたのは、トリボン<sup>とりぼん</sup>が本<sup>ほん</sup>ですが、やっぱり半分<sup>はんぶん</sup>鳥<sup>とり</sup>だからですね。

翌日<sup>よくじつ</sup>、図書館<sup>としょかん</sup>にはいった子どもたちがみつけたのは、机<sup>つくえ</sup>の上<sup>うえ</sup>いっぱいにつまれた



マスクでした。そっと手にとってみると、一枚いちまいデザインがちがいます。

「あっ、これ、パンダ銭湯！」

と3年生の田島さん。口には出さず、こころのなかで声をあげます。

「え、これって、はじめてのおつかい」

と1年生の山本さんも目をまるくします。

山とつまれた新品のマスク、その一枚ずつに、図書館にある本の表紙が、一冊いっさつ描かれています。お世辞にも上手とはいえませんが、見ているうち、なんだか胸がぽかぽかしてくる、そんな絵です。

「おれ、ごんぎつねにしようっと」

と4年生の足立さんが黙ったまま手にとります。

「この、モモ、っていうの、今度読んでみようかって思った」

5年の長谷川さんも同じようにします。

「この、京都絵本っていうの、おもしろそう」

2年生の大山さんはじいっとその絵を見つめます。

「こっちに、注文の多い料理店がある。セロ弾きのゴーシュも」

6年生の西田さん、宮沢賢治に夢中なようです。

しばらくして子どもたちは、それぞれお気に入りのマスクをつけ、席について  
熱心に本を読みはじめました。トリボンはおおと棚から頭をだし、図書館の様子  
をながめました。顔の半分はかくれてしまっているけれど、とりどりの絵のマスク  
の下に、子どもたちみんな元気に笑っている表情が、マスクをすかして見るよう  
にありありと浮かんでいます。

（制作：図書館活用部会）